第 6 章　奄美諸島

あやまる第 2 貝塚（笠利町）

第１節　先史・古代の奄美諸島

奄美諸島は，南西諸島の北半分を占める薩南諸島に入る。薩南諸島は，北から大隅諸島（種子島・屋久島・口永良部島・三島）・トカラ列島（十島）・奄美諸島から成る。奄美諸島には，奄美大島・加計呂麻島・請島・与路島・喜界島・徳之島・沖永良部島・与論島などの有人島がある。

奄美大島は，鹿児島市の南約380㎞にある面積710㎢の奄美諸島最大の島で，南西部に大島海峡を隔てて加計呂麻島・請島・与路島がある。古生代・中生代の岩石を基盤にし，北部は丘陵性に富むが，中南部は急峻で平地が少ない。亜熱帯性の樹木が繁茂し，ハブ・アマミノクロウサギ・ルリカケス等独特の動物が生息している。

喜界島は奄美大島の東約30㎞にあり，面積57㎢の海岸段丘からなる島で，百之台（224m）の東側は約170mの断崖であるが，そのほかは段丘を経て，隆起珊瑚礁か砂丘の海岸である。

徳之島は奄美大島と沖永良部島の間にあり，面積248㎢で島は東北より南西方向に伸び，中央に井之川岳（645m）を主峰とする花崗岩の山地が南北に連なる。海岸段丘が発達し，裾礁に囲まれている。亜熱帯気候で，山地にはタブノキ・ユスノキ等の暖帯林がみられる。

沖永良部島は徳之島と与論島の間にあり，面積95㎢で古生層を基盤とし，数段の隆起珊瑚礁からなる。大山（245m）を最高地点とする低平な島で，大山山麓を中心にカルスト地形特有のドリーネが多数みられる。西海岸では海岸段丘が発達し，裾礁に囲まれている。

与論島は奄美諸島の最南端に位置し，面積21㎢で島の南部に古生層がみられるが，ほとんど隆起珊瑚礁からなり，概して低平な島である。島の周囲は堡礁で取り囲まれている。

奄美諸島の先史・古代は，鹿児島本土とは自然環境の違いにより差異が見られ，沖縄諸島とは一部共通点もみられる多くは独自の文化を形成している。

１　旧石器時代

南西諸島の旧石器文化は，沖縄県那覇市山下洞穴や同県具志川村港川遺跡等での化石人骨が知られているにすぎず，明確な遺構・遺物の検出はなかった。笠利町土浜ヤーヤ遺跡での調査により，Ａ約25,000年前の姶良カルデラ噴出物のＡＴ火山灰とアカホヤの火山灰が発見され，九州島と同様の鍵層が得られた。土浜ヤーヤ遺跡は，ＡＴ火山灰の下位から磨製石斧片３点と剥片が，上位からスクレイパー・剥片が出土している。奄美諸島でも旧石器文化の存在が確認され，同町喜子川遺跡でもＡＴ火山灰の下から礫群とチャートの剥片が出土した。徳之島の天城遺跡では，石灰岩直上の粘土層やその上の暗赤褐色粘土層からチャート製の石器が出土した。石器には，台形石器・抉入石器・掻器・石核等があり，石器の型式学的な見方からＡＴ火山灰下位に想定される。伊仙町ガラ竿遺跡では，層厚30㎝以上のＡＴ火山灰が検出され，その下位から磨石２点が出土した。同様のものは，山下洞穴や種子島の立切遺跡・横峯遺跡でも３万年前の磨石が発見されており，南西諸島と大陸及び日本本土の旧石器文化を比較するのに今後とも重要な遺跡となってくる。

２　縄文時代相当期

沖縄の考古学では，沖縄の土器文化について，縄文文化と一定の共通性が伺われる土器文化でありながら，多種多様な貝・骨角器に象徴される際立った独自性という琉球列島先史文化の二面性が指摘されている。その個性的な文化総体について，縄文文化の中で扱うかは，研究者で意見の相違がある。これまで旧石器時代，貝塚時代，グスク時代からなる現行編年とよばれる時代区分を使用してきた。この現行編年について，高宮廣衛は貝塚時代前期を縄文時代と呼び，後期にうるま時代の名前をあたえた時期区分を提唱している（高宮 1992）。伊藤慎二は縄文文化の中で捉えられるとして，琉球の土器文化として，沖縄・奄美・トカラ共有の土器文化をとらえている（伊藤 1993）。

奄美諸島で初期に発掘調査された面縄貝塚や住吉貝塚，宇宿貝塚の貝塚は，貝や骨などの有機遺物が大量に残存している遺跡として命名されたが，縄文時代に日本列島で形成される貝塚とは異なる。砂丘に立地するため有機遺物が残存していたり，住居跡や土坑等の遺構内埋土に有機遺物が残存している状

況である。集落遺跡として捉えられるものが多い。また，隆起石灰岩で鍾乳洞も多く，洞穴遺跡が多く見られる。このような状況で，貝輪や貝小玉，かんざしなどの貝や骨の装飾品・利器が多く出土し，剥片石器が極めて少ない。土器文化も九州島の影響を受けながら個性的である。

奄美諸島における土器編年の基礎は，河口貞徳が徳之島伊仙町面縄第４貝塚の発掘調査の結果をベースに，型式学的考察を加え，面縄東洞式→嘉徳Ⅰ式→嘉徳Ⅱ式→面縄西洞式→面縄前庭式→喜念Ⅰ式→宇宿上層式ａ→宇宿上層式の順とした（河口 1974）。笠利町宇宿貝塚から市来式土器が出土し面縄東洞式がその影響下にあるとして，面縄東洞式を後期相当としてとらえた。九州島の縄文土器文化と相当する位置づけが可能となった。

さらに，西北九州を中心とすると考えられてきた前期の曽畑式土器が笠利町宇宿高又遺跡で出土した。また，曽畑式の下層から爪形文土器が出土し，イヤンヤ洞穴・中甫洞窟でも爪形文土器が出土し，沖縄県の渡具知東原遺跡・野国Ｂ遺跡・伊礼原遺跡などから出土したヤブチ式土器と類似し，これらの出土例からも南島で古く位置づけられ，九州の草創期の土器との関連が指摘された（岸本 1991）。草創期の土器との関連性については，喜子川遺跡で爪形文土器の下位よりアカホヤ火山灰が検出され，否定的見解が大勢となっている。面縄前庭式が中期に，面縄東洞式・嘉徳Ⅰ式・嘉徳Ⅱ式が後期，面縄西洞式・喜念Ⅰ式・宇宿上層式は晩期に相当すると考えられる。

中甫洞穴は海岸から約2.2㎞の内陸部にあり，標高約100ｍのドリーネ内にある洞穴遺跡である。最下層から爪形文土器が発見され，爪形文土器の上層からは連点羽状文土器・轟式・曽畑式土器が出土し，南西諸島の縄文文化の発生期を知る上で重要な遺跡である。縄文時代の土壙墓も検出されている。

喜界島では昭和の早い時期から轟式系といわれる赤連式土器を出土した赤連遺跡や湾貝塚・荒木貝塚等が三宅宗悦・多和田真淳によって発見され，九学会の調査では荒木農道遺跡等が紹介されている。最近，湾久大真の総合グラウンド遺跡で沈線を施した尖底の完形土器が出土している（澄田他 2003）。この土器は，神野Ａ式土器や船越原遺跡出土土器に類似し，神野貝塚の出土層，放射性炭素年代から，曽畑式土器の前段階に位置づけられるものと考えられる。神野貝塚は，砂丘遺跡で，土器・石器・骨角器・貝製品が層位的に出土した。土器には室川下層式，轟式，具志川式，面縄前庭式，面縄東洞式，嘉徳式，伊波式土器が出土したほか，新型式の土器が出土し，神野Ａ～Ｅ式まで分類される。中期の瀬戸内地方の船元式系土器と春日式土器が出土した。奄美・沖縄の土器編年上の標識遺跡となっている。古い時代もほぼ時期を同じくして，各島へ人が居住した痕跡が伺える。

宇宿貝塚は，標高約13ｍの砂丘上にあり1986年国史跡に指定されている。1955年の調査の結果，土器は上下に分かれて出土し，上部の無文土器は「宇宿上層式」・下部の有文土器は「宇宿下層式」と命名し，上層は縄文時代晩期～弥生時代，下層は縄文時代後期に比定した。現在，下層式は細分化されている。南九州の市来式土器も出土したことから，奄美と南九州の関連があったことがわかった遺跡でもある。宇宿小学校構内遺跡は，条痕文系土器と，その時期の犬の埋葬跡が検出された。下山田遺跡は旧砂丘上に立地する遺跡である。標高約10ｍの砂丘台地にあり，東側傾斜地から集石７基が面縄前庭式・面縄東洞式・松山式土器と一緒に発見された。面縄貝塚群には４か所の貝塚が所在する。第１貝塚は隆起珊瑚礁で形成される狭小な谷状地形にあり，爪形文土器，市来式土器，山ノ口式土器など，縄文・弥生・古墳～古代相当の遺物が出土した。第２貝塚は面縄小学校周辺の砂丘上にある貝塚で，縄文時代後期の嘉徳式土器が出土し，嘉徳Ⅰ式土器と一緒に石囲い住居跡が検出された。第４貝塚は隆起珊瑚礁に２か所ある洞穴部とその前庭部に所在する。南九州の春日式土器が出土し，この貝塚から出土した面縄前庭式・面縄東洞式・面縄西洞式土器は奄美諸島における土器型式の標識となっている。犬田布貝塚は隆起珊瑚礁に形成された岩陰部とその前庭に広がる貝塚である。土器は面縄西洞式・伊波式・荻堂式・喜念Ⅰ式・宇宿上層式土器，石器は石斧・敲石・磨

石・石皿等が出土している。犬田布貝塚で特筆すべきは，骨角器・貝器が多量に出土したことである。特に，シレナシジミの貝刃や鹿角製の垂飾品は徳之島には存在せず，交易を示すものである。これらの貴重な成果に基づいて1989年に県史跡に指定された。

朝仁天川遺跡は名瀬市にあり，海岸西側の砂丘部分に立地する集落後方の山裾傾斜地に立地する。面縄東洞式，嘉徳Ⅰ・Ⅱ式，面縄西洞式，喜念Ⅰ式，宇宿上層式土器が出土している。

嘉徳遺跡は奄美大島の南端にある瀬戸内町に所在する。遺跡は集落の南西端にあり，嘉徳川の河口左岸の砂丘地である。出土土器は，標識となった嘉徳Ⅰ式・嘉徳Ⅱ式土器である。携帯用土器を供献した祭祀遺構の発見及び土坑内から面縄東洞式と市来式土器が一緒に出土した。

長浜金久遺跡群は，遺跡が山手側の旧砂丘から，海側の新砂丘に砂丘が変遷して形成され，時代も縄文から弥生・古墳・奈良～平安時代相当期へと移行する様子がわかるものであった。長浜金久Ⅱ遺跡は，面縄東洞式・嘉徳Ⅰ式土器と住居跡・炉跡・集石・土坑等が検出された。住居跡は竪穴住居で一部石囲いが残るものである。貝輪・貝鏃・貝匙など貝製品も多く出土した。

縄文時代晩期相当からは，各島で住居跡を伴う遺跡が発見されている。宇宿小学校構内遺跡（大島）は，晩期の住居跡７軒と集石９基等の遺構が多くの土器や石器と一緒に発見された。土器では瀬戸内地方の津雲式土器が出土したり，脚部を有する石皿など興味をひく資料が多い。ウフタ遺跡（大島）は，笠利半島との陸繋部にあたる標高10mの西に傾斜した砂丘上に立地する縄文時代晩期～弥生時代前期該当の貝塚遺跡である。遺物は，夜臼系浅鉢・カヤウチバンタ式・仲原式・阿波連浦下層式・石斧・磨石・石皿・貝製品・骨角器等が出土し，石積み石囲い竪穴住居跡が検出された。手広遺跡（大島）は，標高20mの海岸段丘の末端部に形成された砂丘上に立地されている。後期の嘉徳Ⅰ・Ⅱ式土器と集石・石組み遺構が検出され，晩期でも集石・石組み遺構と喜念Ⅰ式土器が発見されている。

住用村サモト遺跡（大島）は，標高８～10mの古砂丘上に立地している。後期の面縄東洞式土器が集石と，石囲いの竪穴住居跡が宇宿上層式土器と一緒に発見された。３回の発掘調査で，７軒の住居跡が検出された。石斧・磨石・石皿のほか櫛形石製品が出土している。ハンタ遺跡（喜界島）では面縄西洞式・宇宿上層式土器に伴って竪穴住居跡11軒が検出されている。天城町塔原遺跡（徳之島）は徳之島西海岸にあり，標高約80mの琉球石灰岩海岸段丘状に立地する。住居跡23軒，土坑４基が検出され，宇佐浜式・仲原式土器・凸帯を巡らす甕形土器や石斧・磨石等が出土している。遺跡は縄文時代後期～弥生時代相当期の集落である。住吉貝塚（沖永良部島）は標高約14mの隆起珊瑚上の畑地に立地する晩期の集落である。1957年に河口貞徳により調査され，石囲い住居跡等が検出されている。町では集落解明のため，2001年から計画的な調査を進め，住居跡等の検出など多くの成果をあげ，搭原遺跡同様の集落遺跡であることが判明した。上城遺跡（与論島）では，住居跡は重複しているが19軒が確認されている。出土土器は宇宿式・宇佐浜式・仲原式土器が見られ，奄美と沖縄の土器の特徴が見られ，地理的環境を考える上でも重要な遺跡である。遺構等は関係者の努力により現地保存された。

このように住居跡が急激に増加する。

喜念貝塚は1932年に発見され，調査された貝塚で，小児人骨や宇宿上層式土器，嘉徳Ⅰ・Ⅱ式土器，貝輪，敲石等の遺物が出土している。喜念Ⅰ式土器の標識遺跡である。1975年の水害では箱式石棺墓が検出され，貝札や土器片が出土したが，そのまま埋め戻された。ヨヲキ洞穴は，海岸より約５㎞以上離れた内陸部の鍾乳洞内にある洞穴遺跡である。あやまる第２貝塚では，面縄前庭式・嘉徳Ⅰ式土器が出土している。

3　弥生時代相当期

奄美諸島の弥生時代相当期は，縄文時代晩期から継続する文化で，稲作等の形跡はみられず弥生文化が定着した遺跡は現在まで見られない。弥生時代の九州島で多用される南海産貝などの供給地や中継地と考えられ，交流を示す遺構・遺物がみられる。

サウチ遺跡は1977年河口貞徳等により調査された

砂丘遺跡である。笠利湾に細長く突き出した半島の先端部にある，南西諸島で存在が明らかになった最初の弥生遺跡である。紡錘車が出土した楕円形竪穴住居跡，貝輪を納めた土坑，床面に礫を並べ巻き貝を添えた土坑などが検出された。磨製石鏃と貝符との共伴関係，羽口の出土など奄美の弥生文化を知る上で重要な遺跡である。

ウフタ遺跡は，1995年農道整備により調査された縄文時代晩期～弥生時代の砂丘遺跡である。標高約10mの砂丘に形成され，晩期の貝塚と土坑，弥生時代の竪穴住居跡１軒が検出された。土坑内からは紐通しの穴を持つ土器や刻目突帯文・大洞系の土器が出土している。住居跡は多重構造の石積み石囲い住居で平面形は５mの方形プランである。面縄第１貝塚では，南九州の山ノ口式土器や箱式石棺墓がみつかっている。笠利町長浜金久遺跡からは山ノ口式土器や免田式土器が出土している。

4　古墳時代相当期

底に木葉圧痕を残す兼久式土器は，古墳時代～古代（６～10世紀）の在地性の強い遺物である。この中の古式タイプが古墳時代該当であるが，まだそこまで分類されていない。南九州の成川式土器が出土した遺跡に長浜金久遺跡・あやまる第２貝塚がある。長浜金久遺跡では本土系の土師甕・焼塩土器や鉄銛・鉄鏃等が出土している。このような土師甕・焼塩土器は喜界島のハンタ遺跡でも出土しており，この時期，奄美諸島にも九州島からの強い文化の影響のあったことがうかがえられる。

5　奈良時代以降

小湊フワガネク遺跡は名瀬市の太平洋側にある古墳時代～古代にかけての砂丘遺跡である。1997年学校建設により発見され，６回の調査が行われた。その結果，７世紀の掘立柱建物跡や貝匙製作所が検出され，兼久式土器と一緒に多量のヤコウガイ貝殻が出土した。このヤコウガイは当時，畿内を中心として螺鈿細工の材料として多く使用されており，その原材供給地としての位置づけが考えられている。

マツノト遺跡は，標高約12mの古墳時代～古代にかけての砂丘遺跡である。リゾート開発に伴う調査で二時期の文化層がありれ，兼久式土器が型式分類できることが判明した。貝製品も大量に出土し，貝札やガラス玉・鉄製釣針等貴重なものが出土している。またフワガネク遺跡同様ヤコウガイ貝殻が多く見られ，交易の重要な問題を提起している。

用見崎遺跡は笠利半島の最北端にある７世紀前後の砂丘遺跡である。標高約10mで，1995年から熊本大学が３回にわたって調査を行い，住居跡２軒と兼久式土器・貝札・貝輪等を発見した。開元通宝の出土もあり，兼久式土器が平安時代まで残るという時代設定が参考になった。

倉木崎海底遺跡は宇検村にある海底遺跡である。今でも台風等の避難港になっている焼内湾の入り口で1992年に大量の青磁・白磁が発見された。海底での遺物の広がりは，東西約900m，幅約200mの範囲にわたり，これらは12世紀後半から13世紀初頭の中国製の陶磁器で，青磁の碗・皿が多い。日本に向かった貿易船が沈没した可能性が考えられ，交易・同時性を知る上で貴重な遺跡となっている。

奄美から沖縄にかけて類須恵器と呼ばれる陶質土器があり，経緯・生産地等不明な部分が多かった。1983年伊仙町阿三字カムィヤキ溜め池工事の際に窯跡が発見され，不明であった類須恵器の様相が判明してきた。1984年，第１支群・２支群の調査が行われ，11世紀後半～13世紀前半の古窯跡であることが判明した。その後，1996～2000年まで重要遺跡確認調査により，18地区27地点支群が確認され100基前後の窯跡が想定される。この結果，窯跡はカムィヤキ古窯跡と名称され，類須恵器と呼ばれていた遺物はカムィヤキと呼ばれるようになった。窯は，全長４m前後で平面形がイチジク形を呈している穴窯である。各支群は丘陵から延びたヤツデ状谷頭付近の斜面中腹に築かれている。この窯跡の発見以後，各地でカムィヤキが確認され，南は八重山諸島から北は鹿児島本土まで分布が広がっていることが判明してきた。

宇宿貝塚では焼骨の入った須恵器壺が出土しており，奄美諸島にも仏教文化の伝来がうかがえる。

（牛ノ濵修）